

新兵庫人

第26部 再生を信じて

一度は助かった命が、次々と消えていく。

地震後の避難生活などによるストレスや体調不良が引き起こす「震災関連死」。阪神・淡路大震災でいち早く警鐘を鳴らした神戸協同病院（神戸市長田区）院長上田耕蔵（60）同市垂水区はこれまでに4度、東日本大震災の被災地を訪れた。「全容はまだ見えないが、かつてないほど関連死が出ているのでは…」大阪生まれの上田と神戸との縁は、北野高校から進んだ

弱者の状況改善訴え

④「医」の目線

神戸大学医学部で育まれた。16年前。神戸の街で、当時から院長を務める上田は「避難所からの救急搬送が続出している」と聞いた。冬の避難所に十分な暖房はない。粉じんやほこりも舞う。過酷な環境が高齢者ら弱者を襲った。上田は肺炎や心筋梗塞が相次ぐ実情を調べ、関連死の存在を訴えた。被災市町は日本

で初めて、震災と関連死との因果関係を認め、遺族に弔慰金を支給。関連死者は兵庫県内で919人上った。その後、関心が高まり、介護が必要な高齢者を施設に緊急入所させる動きも広まった。今年3月。東日本大震災発生から9日後、上田は宮城県

の避難所を巡回した。「支援が集中し、関連死の危険はある程度減っているはず」と踏んでいた。だが、実際には支援者も物資も驚くほど少なかった。石油不足が被災地を孤立させ、暖房もかなわない。低体温症が続出していた。目の前でも70代の女性が突然の心臓発作で倒れ、蘇生を試みたが亡くなった。女性宅を訪ねた上田の前で、家族は

「自宅が浸水し、一人だけ避難所に行かせたが、一緒にいればよかった」と涙ぐんだ。家族はもろろん、医療や福祉も最善を尽くしている、と上田は思う。それでも、弱者から命が奪われる。「想像を絶するほどの災害に、完全な備えは不可能。でも、もう少し

「高齢者や家族は連絡手段や車を奪われ、助けを求めることさえできなかった」。岩手県陸前高田市のケアマネシヤはそう漏らした。支援者も数多く津波で亡くなった。途方もない広域災害による孤立の深刻さに、身震いする。夏を迎え、被災地では仮設住宅の入居が本格化。今度は阪神・淡路で相次いだ独居者の孤独死が心配される。

上田は聞き取り調査を続ける。現場で何が起き、なぜ命が消えるのか。「医療者の目線では訴えれば、状況が改善されることもある。それで一人でも守れたら」（敬称略）

＝4面に続く＝

この連載は毎週日曜日に掲載します。



阪神・淡路大震災後、病院のある地元で特別養護老人ホーム設立に関わった上田耕蔵さん。地域の高齢者を守る取り組みの一つだ＝神戸市長田区二葉町5（撮影・岡田育磨）